

解析力学 要点

神戸大学 学生番号 2233112s 原佑

2025 年 4 月 30 日

1 Lagrange 形式の力学

1.1 Euler-Lagrange 方程式の簡潔な導出

f は、 x, y, y' で決まるものとし、汎関数 I を、

$$I \equiv \int_a^b f(x, y, y') \, dx$$

とする。さて、 I が停留値を持つような $f(x, y, y')$ の形は何であろうか？ここで、停留値では、 $f(x, y, y')$ の形を少し変えた δI について、

$$\delta I \approx 0$$

が成り立つ。函数 y は最初 $y_0(x)$ だったとする。これを、

$$y(x) = y_0(x) + \varepsilon \eta(x)$$

と変化させる。ここに、 ε は函数形を司る微小量で、 $\eta(x)$ は任意の函数である。固定端条件として、 $\eta(a) = \eta(b) = 0$ であって、停留値をとる条件は、普通の微分で、

$$\lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \frac{dI}{d\varepsilon} = 0$$

といえる。

ここで、函数 $f(x(u, v), y(u, v))$ において、

$$\begin{aligned} \frac{\partial f}{\partial u} &= \frac{\partial f}{\partial x} \frac{\partial x}{\partial u} + \frac{\partial f}{\partial y} \frac{\partial y}{\partial u} \\ \frac{\partial f}{\partial v} &= \frac{\partial f}{\partial x} \frac{\partial x}{\partial v} + \frac{\partial f}{\partial y} \frac{\partial y}{\partial v} \end{aligned}$$

であることを思い出して、上を計算する。

$$\begin{aligned}
\frac{dI}{d\varepsilon} &= \frac{d}{d\varepsilon} \int_a^b f(x, y, y') dx \\
&= \int_a^b \frac{d}{d\varepsilon} f(x, y, y') dx \\
&= \int_a^b \left(\frac{\partial f}{\partial y} \frac{\partial y}{\partial \varepsilon} + \frac{\partial f}{\partial y'} \frac{\partial y'}{\partial \varepsilon} \right) dx \\
&= \int_a^b \left\{ \frac{\partial f}{\partial y} \eta(x) + \underbrace{\frac{\partial f}{\partial y'} \eta'(x)}_{\text{部分積分を用いる}} \right\} dx \\
&= \underbrace{\left[\frac{\partial f}{\partial y'} \eta(x) \right]_a^b}_{\text{固定端条件より 0}} + \int_a^b \eta(x) \left\{ \frac{\partial f}{\partial y} - \frac{d}{dx} \left(\frac{\partial f}{\partial y'} \right) \right\} dx \\
&= \int_a^b \eta(x) \left\{ \frac{\partial f}{\partial y} - \frac{d}{dx} \left(\frac{\partial f}{\partial y'} \right) \right\} dx
\end{aligned}$$

上は、 $\forall \eta(x)$ について成り立つゆえ、この値が 0 ならば、

$$\frac{\partial f}{\partial y} - \frac{d}{dx} \left(\frac{\partial f}{\partial y'} \right) = 0$$

である。以上より、Euler-Lagrange 方程式と呼ばれる、

$$\frac{d}{dx} \left(\frac{\partial f}{\partial y'} \right) = \frac{\partial f}{\partial y}$$

を得る。

解析力学の実用上では、一般化座標を q 系の Lagrangian を L として、

$$\frac{d}{dt} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{q}} \right) = \frac{\partial L}{\partial q}$$

から、運動方程式を得ることができる。

2 Hamilton 形式の力学

2.1 Hamilton の正準方程式の簡潔な導出

Lagrange 形式の定式化では、Lagrangian が時間に陽に依存しなければ、一般座標 q_i と一般速度 \dot{q}_i を独立変数として力学を記述する。Hamilton 形式では、一般座標 q_i と一般運動量 p_i を独立変数にとり力学を記述せんとする。

一般運動量 p_i は、

$$p_i \equiv \frac{\partial L(q, \dot{q}_i)}{\partial \dot{q}_i}$$

と定める。まずは、Lagrangian の全微分を考える。

$$dL = \sum_i \left(\frac{\partial L}{\partial q_i} dq_i + \frac{\partial L}{\partial \dot{q}_i} d\dot{q}_i \right)$$

上で示した Euler-Lagrange 方程式と一般運動量の定義から、以下を得る。

$$\begin{aligned} dL &= \sum_i \left(\underbrace{\frac{d}{dt} \frac{\partial L}{\partial \dot{q}_i} dq_i}_{E-L \text{ 方程式より}} + \underbrace{p_i d\dot{q}_i}_{\text{一般運動量の定義から}} \right) \\ &= \sum_i \left(\underbrace{\dot{p}_i dq_i}_{\text{一般運動量の定義から}} + p_i d\dot{q}_i \right) \end{aligned}$$

さて、いま、

$$d(p_i \dot{q}_i) = p_i d\dot{q}_i + \dot{q}_i dp_i$$

ゆえに、

$$p_i d\dot{q}_i = d(p_i \dot{q}_i) - \dot{q}_i dp_i$$

を得る。これを用いれば、

$$\begin{aligned} dL &= \sum_i \left\{ \dot{p}_i dq_i + d(p_i \dot{q}_i) - \dot{q}_i dp_i \right\} \\ d\left(\sum_i p_i \dot{q}_i - L \right) &= \sum_i (-\dot{p}_i) dq_i + \sum_i \dot{q}_i dp_i \end{aligned}$$

である。ここに、

$$H \equiv \sum_i p_i \dot{q}_i - L$$

とおけば、これはエネルギー量で、Hamiltonian と呼ばれる量である。上は、

$$dH = \sum_i \left\{ (-\dot{p}_i) dq_i + \dot{q}_i dp_i \right\}$$

と書ける。本式は Lagrangian の全微分の計算の帰結であった。今度は Hamiltonian を直接全微分して、

$$dH = \sum_i \left(\frac{\partial H}{\partial q_i} dq_i + \frac{\partial H}{\partial p_i} dp_i \right)$$

以上二式を比較すれば、以下の二式を得る。

$$\begin{aligned} \dot{q}_i &= \frac{\partial H}{\partial p_i} \\ \dot{p}_i &= -\frac{\partial H}{\partial q_i} \end{aligned}$$

これらは Hamilton の正準方程式と呼ばれる。